

いしや先生

町おこし映画顛末記

あべ 美佳

▶⑥

6月9日、東京・上野公園の西郷隆盛像のすぐ目の前、グリーンパークホテルで、西川町まちづくり応援団・関東ブロック総会が開かれた。「志田周子の生涯を銀幕に魅よみがえらせる会」からは、プロデューサー2人と私が参加させていただいた。会場は熱気に溢あふれていた。あらためて、山形県人にとって凄すごいと思った。人口千人に対する社長輩出率が全国1位だけはある。あっちむいても、こっちむいても、みんな偉い人。そんな並み居る諸先輩方の中、私は町長さんの横に座らせていただいた。恐縮で汗が噴き出る。

壇上で少しだけ挨拶をし

た。宜よろしく願ねがいます、と一生懸命伝えたが、あんまり頭ばかり下げるのもへんだ。まるで東京から来た製作陣がお金だけ集めにきたように思われる。そのあたりのバランスが難しい。懇談会が始まり、お酒が入ると皆の本音も出てくる。「志田周子って、誰?」「勝手に盛り上がってるけど、

誰のもの? 話せば分かる

何だ、ほれ?」。私たちは会場のざわめきに負けないよう声を張って答える。「おまえ、誰だ?! テイレクタが?!」「いえ、私は作家です」「おまえの名前なん

か、しゃねな。いったい何者だ?! おらだの町に何しに来た?!」

……うう、ここは笑顔でぐっと堪こたえる。あたしもずいぶん大人になったもん

子あて、無名だべ」「そうですね。んでも、誰でも知ってる人を映画にしても、あんまりおもしろくないですよ」「映画なんかつくってもよ、何良いことある?」

のだろう。それは果たして作家の仕事なのだろうか? そういうことを考え始めると、腹に力が入らなくなる。いかん、いかん。

おこがましくも、自身の今の状態と周子先生の境遇を重ねてしまふ。志田周子は当時、必ずしも村人に受け入れられたわけではない。いや、むしろ最初は「経験不足のおなご医者」と疑心暗鬼で見られ、医師としてなかなか認めてもらえなかった。当時は情報も行き届かず無理もないのだが、今は違ふ。あきらめずコミユニケーションを取り続けるしかない。いつか自分たちも町の人に感謝される日が来るのだろうか? 「いやあ、いがったっちゃー」という言葉を頂ける日を夢見て、今日もペンを握る。(脚本家・作家、尾花沢市出身)

▶月1回掲載します



だ。杯をもつた方々が入れ代わり立ち代わりやってくる。中にはいきなりこんなことを言う方もいた。「俺は不安だな、不安。不安しかねえ」「そうですね。何がそんなに不安か、具体的に教えてもらえますか?」まあ、志田周

……とまあ、こんなふう

に一つずつ答えていく。役場の口座なのでお金の持ち逃げなんてしようがないことなども話し、20分以上もやりとりしただろうか。「んー、これは俺のひがみ根性だったかもな。その方が、力を貸してもらえませんか」。私がそう言うと、うん、ま、頑張れやと笑ってくれた。